

カーリングの普及における現状と課題に関する一考察

The present conditions in the curling spread and one consideration about a problem

1K03B803-0

氏名 久光真実

指導教員 主査 木村和彦 先生 副査 作野誠一 先生

【研究動機】

2006年2月に開催されたトリノ五輪及び同大会報道において、日本国内におけるカーリングの知名度と人気は一気に飛躍することとなった。

五輪開幕前は、いわゆる「マイナースポーツ」という扱いであったカーリングであったが、競技日程の進捗と比例するようにメディアでの露出度も増えていき、その人気は閉幕後も衰えることなく長期にわたって維持された。

そのような状況を目の当たりにした時に、カーリングという競技の何が人々の興味関心を引いたのか。そして、それらが五輪閉幕後も維持され続けた要因は何なのだろうかという疑問と同時に、カーリングそのものに対しても興味を抱き、研究に至った。

【研究目的】

オリンピックをはじめとした大規模な国際大会で好成績を挙げると、その選手や競技のメディア露出が増加することは、いまやスポーツにおける一種の法則のようである。

しかし、そこに作用する要因については、「好成績」以外は確固たる基準がないように思える。

競技において好成績を挙げさえすれば、本当にメディア露出は増加するのか。それとも成績以外にも何かが必要なのか。もし、そうであるならば、それは何なのであろうか。

本研究では、今回のカーリングにおける事例を「マイナースポーツの成功例」として調査、分析することで、様々なスポーツの普及振興につながるヒントを探ることを目的とした。

【研究方法】

本研究は、新聞縮刷版を用いた紙面調査とカーリング講習会、大会等のイベント参加者を対象とした質問紙調査を軸とした。

新聞紙面調査では、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞の3紙における長野、ソルトレーク、トリノの各五輪期間の紙面を調査対象とした。

さらに、掲載記事の内容分類、字数算出および写真の面積を測定することで、過去3大会のメディア露出を数値化した上で、分析することとした。

質問紙調査は3回にわたって行い、基本的な質問項目は

共通させる一方で、調査段階で考えられうる参加者特性を生かし、重点を置く質問項目を変える等工夫をこらした。

なお、質問紙調査におけるデータは、SPSS15.0を使用し、項目によって適宜、度数分布、クロス集計、T検定等の統計処理及び分析を行った。

【結果と考察】

新聞紙面調査の結果、トリノ五輪における露出度変化は非常に大きなものであったということと同時に、メディア露出と社会における認知度には一定の関連があるといえることが分かった。

また、参加者調査においては、カーリング体験前と体験後に同一被験者に行ったイメージ調査によって、「静かな⇒にぎやかな」等いくつかの項目に顕著な変化が見られた。これらは、今後カーリングを普及していく上で役立つのではなかろうかと考えている。

また、カーリング愛好者の現状を探ることで、現在カーリング界が直面している問題点を浮き彫りにさせた

【今後の課題および提言】

質問紙調査の分析結果から、カーリング界における最大の課題は、施設の不足に関する問題であるといえる。そして、この施設の不足が様々な問題を引き起こしているということも調査結果から伺えた。

さらには、専用施設自体が少なく地域差もあるという現状に加えて、カーリングのできる設備を備えた施設も少ないということが、この問題の深刻さを増幅させているということも明らかになった。

これらの問題を緩和、解決していく方法として、筆者はステークホルダーの増加を提案した。他の競技団体やスポンサーといった既存のものだけでなく、今までにはなかったような様々な分野とつながっていくことで、メディアを始めとする社会的な露出度を増やすと同時に、人々がカーリングに触れる機会をも増やすことにつながるのではなかろうか。

トリノ五輪及び同大会報道によって、日本国内において一定の認知度を得た現在、カーリング界においては、直接的な普及活動のみならず、長期的なスパンで考えた間接的な活動を展開していくことが重要となるのではないかと筆者は考え、提言を行うこととした。